

2018年4月27日発行

アマスト大学の丘から

上田明子

「自己の内心を見ることをやめ、十字架上のキリストをあおげ」とのシーリー先生の言葉に、内村鑑三先生が「信仰上の大改革」を経験したアマスト大学を訪ねる機会を一昨年夏いただきました。澄んだ空のもと、小高い丘に点在する校舎、アメリカの大学はセキュリティが厳しいので、入れてもらえるかどうかと心配しながら、娘夫妻と、図書館にむかいました。入り口のデスクに



趣旨を伝えると、係りの男性はすぐさま「どうぞ、どうぞ、その角を曲がったところですよ」との答。その肖像画の前に立った我々のために、東アジア専門の館員を紹介してくださり、その女性は、日本との交換関係などを説明しながら、講堂へと案内してくださいました。別の建物の階上の講堂は簡素な作りで、シーリー先生をはじめ、歴代の学長の肖像画が四方の壁を囲んでいました。内村先生と、先生を継承する歴史が生きていると感じさせられた訪問でした。

日本では、書籍の「内村ブーム」があると聞きます。多数の出版物があり、そのうち、最近の『内村鑑三 悲しみの使徒』若松英輔著（岩波新書 2018年）は、無教会外の評論家の著書で、内村先生の置かれた社会状況、師事し、あるいは去って行った人々、先生の「霊性」と、よく網羅されていると感じました。一方、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』（岩波文庫 2017年）の新訳は鈴木範久先生によるもので、若き日の内村先生の思いにみちていて、その苦難、その中で与えられた啓示と、身にしみるものがありました。

その継承はと問われれば、私にとっては、内村先生、塚本虎二先生、そして、津田塾大学の寮集会室での諏訪信先生によるガラテヤ書、前田護郎先生と辿ることになります。「わけわからずやのガラテヤ人」と厳しいパウロの言葉ながら、そこに示された神様の愛に始まり、信仰のみという福音をいただき、内村先生の多面性の中から一筋に継承する福音を感謝したく存じます。

（経堂聖書会）

目 次

表紙・巻頭言

目次・内村鑑三の言葉・写真の説明……………2	学寮だより……………10
内村鑑三記念キリスト教講演会（東京）…3	全国各地からの報告……………13
内村鑑三記念キリスト教講演会（大阪）…5	定期集会・地域別特別集会等……………16
内村鑑三記念キリスト教講演会（名古屋）……………7	事務局便り……………19
	編集後記……………20

「末長敏事」という方をご存知ですか？
……………9

内村鑑三の言葉

浩然の気

内村鑑三

最も善きものは、宇宙の神の聖き霊なり。その次に善きものは、全地を払う清き風なり。小人閑居して不善をなすは、この霊とこの風とに触れざるがゆえなり。われらはなるべく多くこの二つの靈気に触れて、常に喜んで常に働くべきなり。

（『聖書之研究』1904年4月、『内村鑑三信仰著作全集』8巻、教文館、1965年）

（選：今井館教友会理事長 大山綱夫）

表紙の写真について

今井館に遺されている、内村鑑三が在学当時のアマースト・カレッジの教会（兼講堂）の写真。講堂正面には右側に新島襄（同志社大学設立者）の肖像画がある。

（K. N）

